

だがしや楽校 de ワクワク大作戦～ゆるく楽しく地域とつながろう～

第7回だがしや白熱楽校～これからの生き方を語り合おう～

平成27年8月22日土曜日 10時から12時 於：セッション杉並

コース学習支援者： 東北芸術工科大学 松田道雄教授

補助者：学校地域コーディネーター 谷原博子

コースアドバイザー：東京大学大学院 牧野篤教授

講師 東京大学大学院教授 牧野篤

東京大学大学院教授 牧野篤

1960年愛知県生まれ。1988年、名古屋大学大学院教育学研究科博士課程修了。名古屋大学大学院教授を経て、2008年より東京大学大学院教育学研究科教授。専門は中国近代教育思想、社会教育、生涯学習。日本のまちづくりや高齢化・過疎化問題、多世代交流型コミュニティの構築等に取り組んでいる。著者には『生きることとしての学び』（東京大学出版会）、『シニア世代の学びと社会』（勁草書房）、『農的な生活がおもしろい』（さくら舎）などがある。



東京大学大学院教授 牧野篤

はじめまして、東京大学で高齢社会総合研究機構というところで働いております牧野と申します。こんなに多くの方がいらっしゃるとは、本当に嬉しいです。松田先生からのご依頼で、今日はお話させていただきます。ちょっと大きなテーマであるのですが、ソーシャル、「社会的であること」の大事さなどについてお話していきます。一言で言えば、社会のことを考えながら行動しようということです。このように言いますと、社会のために自己犠牲を求めているのではと思われるかもしれませんが、そうではありません。楽しいことをやると、社会のためにもなるよということです。ちょっと大げさに言うと、国土強靱化、地方創生、人口基盤の強化、人材育成など叫ばれていますが、それらを解決するカギとなるのが、小さなコミュニティです。

国の会議など、いろいろ関わっておりますが、政府はすごく焦り始めています。急いで国土を強靱化したいと言っています。特に今は少子高齢化。子どもをどう増やすか、生んでもらえるような社会を作るのが先ですよ。ところが、国としては、生まれようという方向に議論が向きがちです。安心できる社会がないと、子どもを産もう、育てようという気

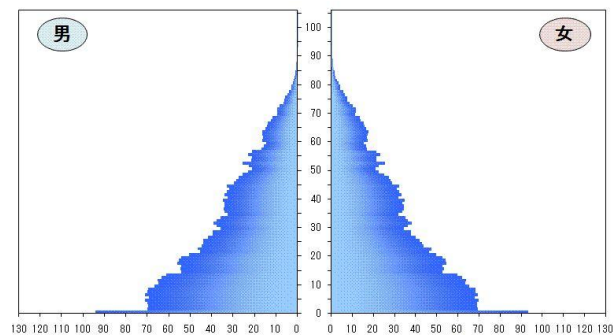
持ちは起きません。子どもが減れば、市場も縮小しますし、人口構造も変化します。

グローバル化が進んでいますので、雇用構造が変化し、仕事がある都会に人が流れるため、地方はどんどん過疎化します。そうすると、自治体も再編したり、大きな変革を余儀なくされます。生活の場所の近くにあるのが地域ですが、雇用や人口の問題は、つながりを薄くしたり、孤立化を呼びます。今日のお話が、これから、皆さんがどう活動するか考えるキッカケになれば幸いです。

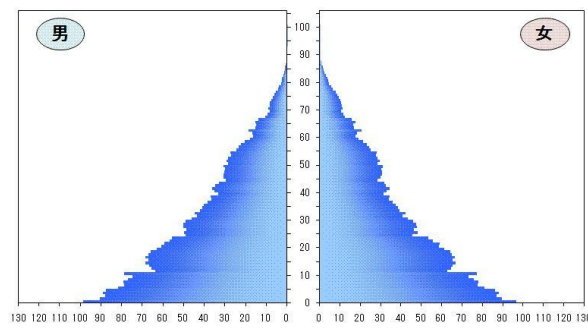
日本は先進国と呼ばれていますが、課題という意味でも先進国です。まず、1つ目に少子高齢化が急激に進展しています。ここまで、人口構成が変わることは、戦争を除いてはなかったです。2つ目には、雇用の問題。東大の学生でも、就職ができない状況です。グローバル化も手伝い、産業構造がかわってきて、若い人の生活が安定していません。2割が職がない状態で、非正規での雇用が増えています。正規雇用が増えていません。3つ目に、首都圏集中がおきています。仕事がある中央都市に、どんどん人やサービス、会社が集まり、地方はどんどん廃れています。4つ目に、そんな地方では、どんどん自治体合併が増えています。いままで住んでいた地域が、急に合併されるのです。最後、5つ目としては、つながりが不確かになってきています。孤立してしまう人が増えています。現在の日本では、65歳以上の人口が26パーセントを超えました。4人に1人が高齢者。7パーセントを超えると高齢化社会。14パーセントを超えると高齢社会。21パーセントを超えたので超高齢社会。高齢社会の数字をお話しましたが、高齢社会って良くないイメージですよ。高齢者が増えると悪いことばかりが起きてしまうイメージがあって、自分自身も年をとるのが申し訳ないような気がしてきます。

少し、人口ピラミッドをみてみましょう。

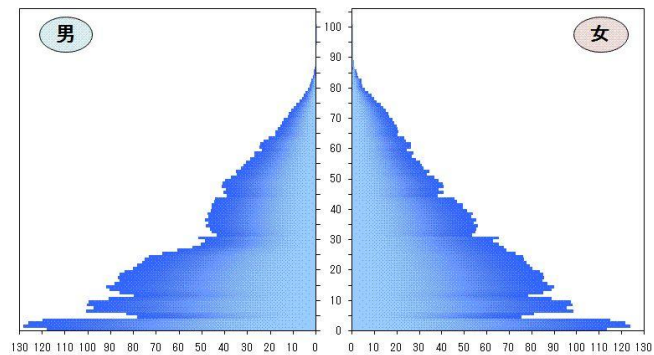
下が子ども、上に行くほど年齢があがります。1920年。190万くらいの子どもの生まれていますが、1歳までに3割は亡くなっています。栄養と医療、衛生が良くなかったからです。



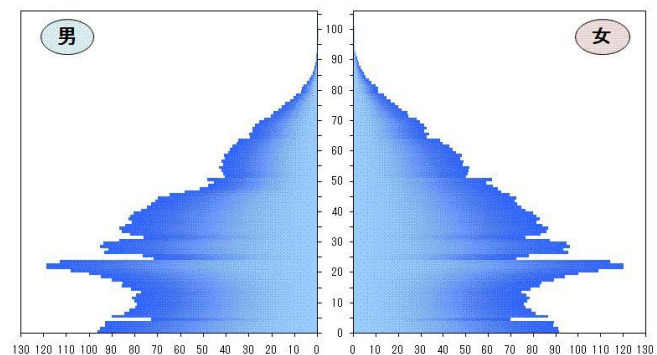
1930年。200万人生まれて、ほぼみなさん1歳になれました。工業化が進み、また、栄養、衛生、医療も改善されたおかげです。



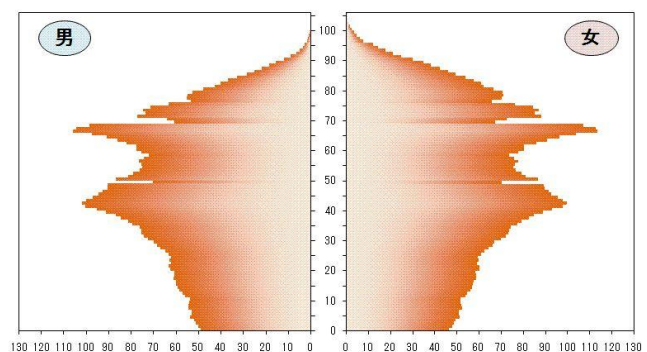
1950年。870万の子どもが生まれました。団塊の世代ですね。人口が増えている時代です。1960年になると、家族計画が国民運動として出来て、核家族が生まれました。3LDKが基準の家になり、お父さんは働いていて、家にいないイメージです。



1970年。前後してオリンピック、万博がありました。人口1億人です。一方、高齢者が7パーセントになったのも、この時代です。みんなイケイケドンドンで気づいていなかったのでしょうか。母体保護法をかえて、墮胎しやすい国になった。経済的理由をふくめて、父親が同意し、産婦人科が母胎に影響無しと判断すれば墮胎できるようになりました。ひのえうまの年は子どもが少なくなっています。



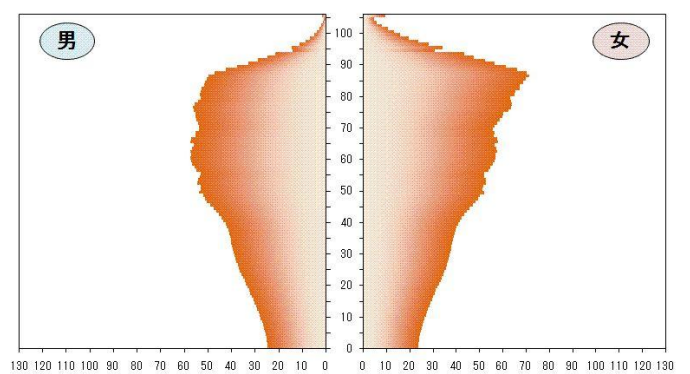
1994年。高齢社会になりました。2005年愛地球博の来場者は600万人、大阪万博は6000万人でした。



2050年。4割が高齢者になります。
2060年には8600万ほどの人口になるだろうと言われています。

出典

国立社会保障・人口問題研究所



うれしくない統計をもう1つ。要介護者です。現在は500万人ですが、2050年には800万人。2060年には人口が8600万人で、850万の要介護。1割が要介護となる計算です。0歳から14歳の子どもは、要介護の人より少ない時代になってくるのです。

消滅可能性都市という言葉が出てきました。これを聞いた自治体は憤ったり、焦ったりしていますが、一極集中は実際に起きています。首都圏と愛知県、滋賀県だけが増えています。25年後に若年女性が減るため、人口が半減する自治体が全体の半分になります。高度成長期は製造業が多く、雇用する力が強かったです。製造するには、作る人、直す人など人手がかかり、その分、雇う人も増えるからです。不動産は事業の額が大きいので、儲ける力が強く、当時は金融と保険が少なかったです。今は、インフラ系が赤字産業になり、保険、金融は儲かるのですが、雇用する力がありません。パソコン1つで仕事が出来てしまうからです。サービス業は非正規になっていて、若い人が従来型の就労が出来なくなったのです。高度成長期、オイルショックで人の出入りは一旦止まりましたが、バブルのころには再び東京に集まり、平成不況でさらに、東京に集まってしまいました。明治以降、町内会という組織が出来ました。当時は、小学校の学区が町村で、そこにあらゆるお店が入っていました。小さすぎるので合併を繰り返しましたが、学区が町内会の範囲だったのです。神社やお寺も学校区単位で再編しました。小学校をベースにしながら、生活の基盤を100年くらい使ってきたのですが、統廃合で学校がなくなると、町内会なども壊れてしまいます。その結果、住んでいる人は頼れる場所がなくなり、孤立してしまいます。

高齢社会とは、先ほども申しましたが、あまり良いイメージはありません。しかし、高齢者だけの社会になるのではなく、高齢者を含めたすべての人々が生きる社会になるということです。すべての人々が100年生きられる社会です。男性は85歳が一番亡くなりやすい年齢で、女性は90歳と、本当に長く生きられます。つまり、最後の5・6年が要介護になるかもしれませんが、退職してから20年くらいは自由な時間があるということです。余生にするには、十分な時間ですよ。高齢者は若返っているという統計も出ています。1992年と2002年の歩行速度を比べると、11歳若返っており、今の70歳は、10年前の59歳くらいの体力がある計算となります。頭の方がどうなのか。言語能力や日常問題解決能力は生涯高まっていきます。一方、短期記憶は下がっていき、すぐに忘れやすくなります。これは、仕方ないことですが、コミュニケーション能力は死ぬまで伸びます。高齢期の可能性は、すごくあるのです。頼るのではなく、高齢者が自立して生活すること。自立とは頼り頼られる関係を作れること。ここが大事です。



最近の不況のなかで、強い個人になることばかりが強調されています。学生は就職したあとに鬱になり、私のところに相談にやってきます。今の子は、1人で抱え込んでしまうのです。強い個ではなく、つながりを求められる個人、社会になっていけばと思います。家から会社に通勤するだけでなく、家と働くことが近い定住へ。会社からコミュニティに出てくること。Aging in Placeと呼ばれていますが、All in Place. 自分がある地元に、自分が必要なものが全部あり、自分も様々に参加できる社会。納得し

て年を取っていく仕組みです。

社会の根本は、自分がいる場所。自分が住んでいる場所。生きている場所が根本になります。世界的にみても、社会の基盤がしっかりしている国は、それほどありません。すべての人が希望を持って生きられる社会にするには、公が作る社会基盤だけではなくて、助け合いや、いつでも参加できる場など市民的基盤も必要です。こういう社会は、これまでの社会システムだけじゃ扱いきれません。だからこそ新しい社会の担い手が求められます。これが、基礎自治体のあり方を決めていきます。基本は、一人ひとりが生き活きと生きられて、お互いを認めあえる社会を作っていこうということです。少し統計の話やかたい話が続きましたが、皆様のご意見を聞かせてください。駆け足となり申し訳なかったのですが、ひとまず以上とさせていただきます。ありがとうございました。

日直（当日の受講者の中で選ばれた人）

大変分かりやすく、今の世の中のことを実感しました。同時に、危機感も覚えました。ひとつ言えるのは、老人が固まらない方が良いのかなと思っています。

「どんな未来であってほしいのか」をお互いに考え、話し合ひましょう

（グループ討議）



（各グループの発表）

グループ A

昔のような顔の見える地域にしたいです。

子供が定着して欲しいですし、家族が定着できるような社会にしたい。

おやじの会などの新しい関わり方もできる時代です。どんどん関わっていききたい。

2050年には、団塊の世代がいなくなります。団塊の世代がなにをできるかを考えたい。

グループ B

子どもがいて幸せであることを伝えたい。

最低限の生活を保証されていれば、安心できるはず。

今あるものから、幸せな社会をつくりたいが、良い案がまだない。

グループ C

「助けて」が言える社会にしたい。

世代間の交流が生まれる世の中であってほしい。

下町のように近所つきあいができたら良いと思う。

もうちょっとよい政治家がでてきたら。

グループ D

移民の政策よりも、彼らが日本の社会に溶け込めるような社会にできたらと思う。

全ての人が生まれたところに居心地よく住める社会であって欲しい。

食文化を守れる世の中にしていきたい。

年をとっても、自立してお互い助け合える社会になれば。

自分たちが社会を作れるようにしていきたい。

グループ E

介護の職が社会的に認められる世の中になって欲しい。

若い人が雇用されやすい社会になって欲しい。

グループF

国からよりも、個人から発信できる世の中になって欲しい。

ジェンダーが平等になったら良いな。

健康に働ける社会で、ゆとりある社会であって欲しい。

身近なところから、自分ができること、自分たちから開いていこうと思う。

東京大学大学院教授 牧野篤

ありがとうございました。地域で何かやりたい方、やっている方、学んでいらっしゃる方が集まっていると、熱のあるご意見が聞けるなと思いました。未来のことを考える時に、そのために、地域コミュニティが、どうあったらいいか。そのために自分はなにをすべきか。自分と仲間はどのような関係であるべきか。そんな視点でも考えてください。今までは国という単位で考えてきたのですが、住んでいる地域から楽しく豊かにしていく社会を作っていくと、それが広がり、国全体が豊かになると思います。ある地域では、中学校と高校と連携しながら、学生が帰ってきたくなる地域をつくっています。彼らが大きくなり、帰って来て、地元で職をつくりたいという若者がでてきています。青森の小学生が野菜を東京で売る事業もあります。子どもと飲食店の社長が名刺交換をして、営業をします。地元に戻ると、子どもたちは親に話します。「大人は、村のことを悲観して言うけど、東京にいくと良い村って言ってくれるよ。」。子どもたちにとっては、村への自信にもなり、親は子どもを応援したくなります。子どもたちは、村を良くしていきたいと言っています。だがしや楽校にも、いつか子どもがやってきて、なにか作れたら良いなと思います。12月にまたお会いできたら幸いです。本日は、どうもありがとうございました。